

百年史制作よもやま話



伝統と革新の、その先へ
1928 - 2028

みらいにつなぐ 市大の歴史

vol.3

2023, WINTER



理科館（1983年撮影）

理科館は1970年に建設され、約50年に亘って理学系の教員・学生の研究拠点となってきましたが、金沢八景キャンパス再整備計画により2017年に取り壊されました。解体前に開催された「さようなら理科館！お別れ会」には300人以上の参加者が集まり、別れを惜しまました。

Contents

3 学術院の設立

4 歴史に名を遺す市大教員 ①

三枝博音先生

5 福浦キャンパスへの移転

6 横浜市立大学の国際化に向けた英語教育とPEセンター

7 木原生物学研究所

8 災害時の活躍—関東大震災—

各月のできごと

(1月～6月)

1月

- 1955年 「横浜市立大学学則」制定
- 2001年 特定機能病院に承認される(附属病院)

2月

- 1949年 商学部と医学部同時に設置認可
- 1959年 体育館完成
- 2014年 金沢八景キャンパスに「理学系研究棟」竣工

3月

- 1901年 本校講堂において横浜商法学校創立二十周年記念式が挙行される
- 1986年 木原記念横浜生命科学振興財団が設立
- 1998年 神奈川県から災害拠点病院に承認される(附属病院)

4月

- 1949年 新制大学として横浜市立大学設立(商学部)
- 1987年 福浦キャンパス開校、RI研究センター同時にオープン
- 2001年 鶴見キャンパス設置

5月

- 1994年 初の市大出身者 梅田誠教授が学長に就任
- 2007年 神奈川県エイズ治療の中核拠点病院に指定(附属病院)

6月

- 1927年 秩父宮殿下、十全医院に御台臨
- 1983年 木原研準備委員会設置
- 2000年 市民総合医療センター全床オープン



こちらの素材はデジタルアーカイブでご覧いただけます



リンク先のページから
「横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ」
を選択して下さい。

学術院の設立

横浜市立大学は、病院教員を含むすべての教員が学術院に所属しています。学術院は、領域横断的な研究の推進や柔軟な課題対応を目的として作られた組織ですが、設立までには紆余曲折がありました。

当時学長補佐として学術院設立に関わった窪田吉信元学長にヒアリングした内容をもとに、学術院設立までの経緯や効果などをご紹介します。

学術院の前身：研究院

2005年に大学が法人化した際、教員の所属組織として「研究院」が設置されました。領域横断的な研究分野を開拓し、柔軟な教育・研究体制を構築することを目的に立ち上げられた組織でしたが、成果も見られたものの、いくつか課題もありました。

これらの課題は、大学及び

病院に硬直的・閉鎖的な運用

を招き、教育研究の進展等に
応じた柔軟な組織編成や、大
学独自の自主的・自律的な取
組を阻害していたことでした。

特に医学部においては、福
浦キャンパス（附属病院）と浦
舟キャンパス（センター病院）の
間で、意識のずれや温度差が
生じ、対立が深刻化してい
きました。

研究院

成果

- 共同研究の推進
- 外部資金獲得に向けた支援強化
- スピード感のある病院経営
- 診療機能の強化

課題

- 分野の融合が進んでいない
- 学部間の連携が進んでいない
- 教員人事の権限に関する制度的不備

研究院再編に向けた検討

このような状況を受け、次のような方向性のもと、研究院の再編に向けた検討が始まりました。

- ・大学の法人化に伴う組織・制度改革の趣旨を踏まえること
- ・病院教員を含むすべての教員が所属し、連携する組織とすること
- ・学長のリーダーシップを発揮できる仕組みを確立すること

学術院の設立

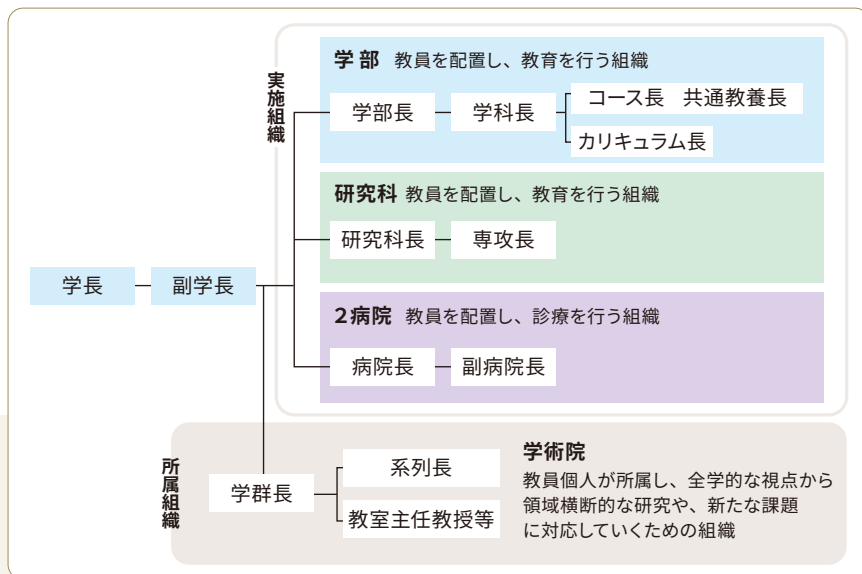
こうした検討を経て、2011年4月に「学術院」が設置されました。この組織は教員の所属組織としての機能を果たし、教員はすべて国際総合科学群・医学群のいずれかに属することになりました。同時に、教員人事の調整機能及び組織間の調整機能も果た

し、大学全体の組織的安定をもたらしことになりました。

参考文献

- ・平成23年度学術院全体会（2011年4月4日開催）資料 ※学内公開資料
- ・横浜市立大学Webサイト「学術院-YCU Academic Association」
<https://www.yokohama-cu.ac.jp/univ/outline/yaa/index.html>（2023年4月18日閲覧）

- ・窪田吉信先生ヒアリング回答の全文は「横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ」をご覧ください
(<https://ycu-history.repo.ni.ac.jp/records/1178>)

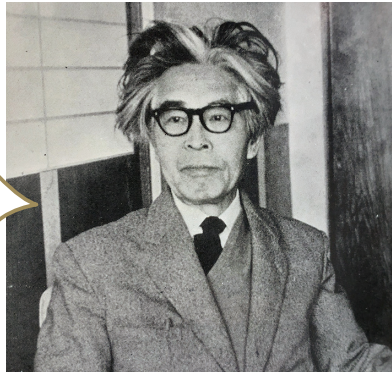


学術院組織図

歴史に名を遺す市大教員 1

三枝博音先生

さいぐさひろと



ご友人から見た三枝先生的一面

- ・旅行が好きだった（文筆の仕事も兼ねて）
- ・チェーホフを敬愛し、原著を読むためにロシア語を熱心に学んでいた
- ・下戸ながら友人たちのお酒に付き合う一方、友人を銀座の汁粉屋に連れていくことも（『三枝博音のおもかげ』より）

三枝先生と鎌倉アカデミア

鎌倉アカデミアとは、第二次世界大戦直後に各地に誕生した自由大学のひとつで、

1946年に鎌倉大学校の名前で誕生しました（1948年に鎌倉アカデミアに改称）。三枝先生は開校時は産業科長を、

同年9月からは学校長を務め、「楽しい学園」をつくりあげ、そのため尽力しましたが、財政難に見舞われ、アカデミアは1950年に廃校となりました。その後、三枝先生をはじめ、鎌倉アカデミアの教壇に立った複数の教員が本学に移り、教鞭を取ったそうです。

三枝先生と横浜市立大学

1952年4月、三枝先生は本学に新設された文理学部の教授として着任し、西洋哲

学内外に広く知られている先生方にスポットライトをあてる「歴史に名を遺す市大教員」。第1回は、本学第4代学長であり、哲学、科学・技術史研究の泰斗であった三枝博音先生をご紹介します。

学史、論理学、科学史、技術哲学、自然科学概論、東洋哲学史等を担当しました。

1956年の文理学部長就任後は、横浜市の財政緊迫化に端を発した合理化問題に對処し、文理学部の存続に尽力します。

そして、1961年10月22日、第4代学長に就任しました。この間、1959年の東洋化工爆発事故（みらいにつなぐ市大の歴史V01.2参照）をきっかけとした本校舎の建築が進み、1963年6月末に無事完成を迎えています。

鶴見事故による逝去

1963年11月9日、鶴見区内の踏切で鶴見事故が発生します。三枝先生は東京で開かれたシンポジウムや会合に出

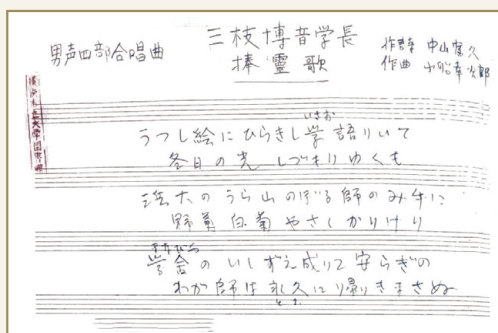
席し、帰宅のため乗車していた横須賀線下り列車の中で事故に遭遇し、帰らぬ人となりました。

11月25日に行われた大学葬では、三枝先生のために作詞・作曲された捧霊歌が歌われ、文部大臣、神奈川県知事、横浜市長を始めとする多くの各界代表者や学生による弔辞が読まれました。

逝去後、本学教員・学生によつて三枝先生の蔵書仮目録が作成され、1966年1月にご遺族から大学に寄贈されました。この三枝文庫は現在、学術情報センター書庫で閲覧することができます。

参考文献

- ・横浜市立大学三枝博音先生没後50年記念事業委員会編『三枝博音…大学と思想…三枝博音先生没後50年記念誌』横浜市立大学学術研究会、2013年
- ・横浜市立大学学術研究会編『三枝博音のおもかげ』横浜市立大学学術研究会、1964年
- ・横浜市立大学「編」『三枝博音先生』横浜市立大学、1963年
- ・横浜市立大学60年史編集委員会編『横浜市立大学六十年史』横浜市立大学創立60周年記念事業実行委員会、1991年



三枝博音学長捧霊歌楽譜の一部（『三枝博音先生』より抜粋）

作詞は中山富久（作家・詩人・元横浜市嘱託）、作曲は小船幸次郎（指揮者・作曲家）が担当。

福浦キャンパスへの移転

医学部・附属病院が福浦キャンパスに移転するきっかけとなったのは、浦舟町にあった医学部基礎校舎の老朽化でした。

新校舎の建設に当たっては、中間土地（浦舟町の病院と医学部基礎校舎の間の土地）や近接地、遠隔地に移転する計画など様々な案が出されました。

1970年

医学部教授会の将来計画委員会会で、横浜市中期計画の



1980年頃の金沢埋立3号地

築について検討され、余裕ある空間の必要性が議論されました。↓学内で移転運動が開始。

1973年

横浜市が浦舟町の病院周辺の土地である中間土地を買収し、そこに基礎校舎を建設するという提案を行いました。

校舎建設の早期実現の可能性を考慮し、教授会でもこの案が了承されました。

1977年

建設案作成と同時に用地獲得に向けた交渉が行われましたが、交渉が難航したため、中間土地の獲得を断念せざるを得ないことが、12月の教授会で報告されました。

1978年

水道局資材置き場の跡地（崖下土地）の利用計画案が

教授会に示されたことを受け、「医学部拡充に関する特別委員会」が発足しました。この

委員会は水道局資材置き場跡地は受け入れられないこと、建設は移転を前提とすべきという

「教授会見解」を発表し、翌年1979年に大学評議会でも審議された結果、「医学部の意思を尊重する」という結論に達しました。

1979年

2月15日、川上学部長と医学部連絡会議の代表が細郷横浜市長と会見し、755名の署名を得た「医学部移転拡充に関する陳情書」を提出しました。会見当日は学生160名が集まり市庁舎前で総決起集会を開きました。

同年5月12日、全医学部集会が開かれ、530名が参加

1981年

現在の福浦キャンパスがある金沢埋立3号地が確保されました。

このような紆余曲折を経て、1987年2月19日、福浦キャンパスへの引っ越しが開始されました。天候にも恵まれ、移転は10日ほどで完了しました。

移転で使用された4トントラックは延べ約700台、諸経費は当時の金額で約1億円だったそうです。福浦キャンパスの開校は同年4月のことでした。その後、横浜市立大学附属病院が1991年3月に竣工し、同年6月に開院しました。



2000年頃の福浦キャンパス

参考文献

- ・横浜市立大学60年史編集委員会編『横浜市立大学六十年史』横浜市立大学創立60周年記念事業実行委員会、1991年
- ・三杉和章編集『横浜と医学の歴史』横浜市立大学一般教育委員会、1997年

横浜市立大学の国際化に向けた英語教育とPEセンター

「学ぶための英語」から
「使うための英語」へ！

これは本学の「Practical

English Center」(PEセンタ

ー)が掲げる横浜市大の英語教育の理念です。「横浜から世界へ羽ばたく人材育成」が基本方針であり、知の創生・発信に取り組み本学にとって、英語教育はとても重要な事業のひとつです。PEセンターの取り組みを中心に、本学における英語教育の変遷をご紹介します。

ます。 2011年の文部科学省の「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」最終報告にて「グローバル人材」育成の必要性が謳われ、大学を起点とした英語教育の改革や世界展開力の強化が全国的に求められるようになりました。

一方、本学ではそれに先駆け、2005年の独立行政法人化時点で、「学ぶための英語」から「使うための英語」を目指した「Practical English 教育プログラム」が始動していま

全学部必修の英語科目「Practical English (PE)」を導入し、

2005年から導入されたPEは「大学における知的活動を英語によって行えるレベルのコミュニケーション能力を身につけ、それぞれの専門分野を学んでいくためのスターティングポイントに立つこと」を目的としており、PE合格、すなわちTOEFLで500点以上

あるいはTOEICで600点以上等を取ることが、3年進級の必須要件となりました。しかし、2005年度生の2年終了時のPE合格率は約7割で、多くの学生が留年の危機を迎えている、と新聞にも取り上げられました。

その後、本学の英語教育全般を統括し、全ての学生がPEの単位取得要件を満たせる教育と英語力向上を目指し

て、2007年4月に設立されたのがPractical English Center (PEセンター)です。PEセンターではAdvanced Practical English (APE)コースの設立(2010年)、コミュニケーションアワーやOne-on-One Communication、日本の大学で14番目となるライティングセンター(2016年9月)の創設等を実施しました。また、看護学科の1年生を対象とした医療コミュニケーション実習や、国際教養学部

の4年生を対象とした卒業英語要旨作成ワークショップ等、学生の「使うための英語」のサポートに取り組んでいます。PEセンターが設立された結果、2年修了時のPE合格率も今や97%にまで達しており、本学における英語教育の更なる発展に挑み続けています。

法人化時の大学の目標

- ・市民が誇りうる市民に貢献する大学となること
- ・発展する国際都市・横浜とともに歩み、教育に重点を置き、幅広い教養と高い専門的能力の育成を目指す実践的な国際教養大学となること

基本方針

教育重視

学生中心 地域貢献

参考文献

・佐藤響子、Carl McGary、加藤千博編『大学英語教育の質的転換…「学ぶ」場から「使う」場へ』春風社、2019年

・産学連携によるグローバル人材育成推進会議『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』文部科学省、2011年

・「2年生半数、留年の危機」朝日新聞、2006年12月8日、夕刊、14頁

・TOEFLメールマガジン Vol. 87 (May, 2010)、
<https://eijapan.jp/toefl/malimazine/mm87/educators-01.html> (2023年7月13日閲覧)

PEセンター設立時の方針

- ・明確な目標
- ・習熟度別クラス編成
- ・少人数制
- ・オールイングリッシュ
- ・英語を使うことを重視
- ・統一シラバス、統一テキスト
- ・教員はTESOL(英語教授法)の専門家

木原生物学研究所

木原生物学研究所の歴史は、1942年の京都まで遡ることが出来ます。

木原均博士によって設立された同研究所は、幾度の変遷を経ながらも植物に関する最先端の研究を行ってきました。

同研究所にゆかりの深い梅田誠元学長と荻原保成元木原生物学研究所長にヒアリングした内容をもとに、木原生物学研究所の歴史をご紹介します。

木原均博士とはどんな人？

木原均博士の名前を世界的に知らしめたのは、コムギの祖先の発見、そしてゲノムの概念の確立ですが、他にも様々な分野で活躍しました。

木原生物学研究所の現在

植物遺伝資源科学、植物ゲノム科学、植物応用ゲノム科学、植物エpiteノム科学の4

部門を中核として、理化学研究所等とも連携しながら、研究所が保存しているコムギやトウガラシの遺伝資源を活用した研究を進めています。

木原博士の業績は、木原生物学研究所内、**木原記念室**でご覧いただけます。

カラコルム探検は映画にもなりました

研究

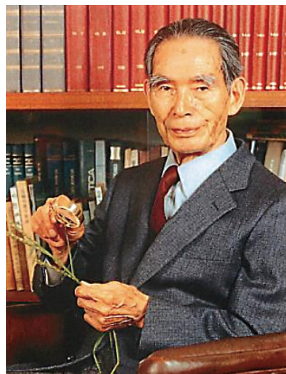
種無しスイカの研究、左右性(ネジバナ等)の研究等

探検

京都大学カラコルム・ヒンズークシ探検隊隊長

スポーツ

全日本スキー連盟の技術委員長や会長を歴任



地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に記されてある

(1946年の言葉)



現在の木原生物学研究所

木原生物学研究所の歴史

- 1942年 京都郊外の物集女地区に木原生物学研究所設立
- 1957年 横浜市南区六ツ川に研究所を移設
- 1969年 三島に研究所の分室を設立(1978年には経営難により閉所)
- 1970年 横浜の敷地の7割と研究施設を横浜市に売却
- 1982年 木原生物学研究所設立40周年を機に、公的機関への寄託を検討開始
- 1984年 横浜市立大学の附置研究所として再発足
当初は六ツ川の研究所と中村町の医学部分室の2か所で研究を行っていました。
- 1993年 舞岡リサーチパークの中核施設として新研究棟着工
- 1995年 新しい横浜市立大学 木原生物学研究所オープン



中村町の医学部分室

参考文献

- ・木原ゆり子「木原均先生小伝」研究と探検とスポーツと」『北海道大学総合博物館ボランティアニュース』特別抜粋号、2015年6月
- ・木原記念横浜生命科学振興財団 Webサイト「木原均博士と生命科学」
<https://kihara.or.jp/about/doctor-kihara/> (2023年8月1日閲覧)
- ・横浜市立大学教育推進課舞岡キャンパス担当『横浜市立大学木原生物学研究所』2023年
- ・梅田元学長、荻原元所長ヒアリング回答の全文は「横浜市立大学周年史デジタルアーカイブ」で閲覧ください
- ・梅田元学長 <https://ycu-history.repo.nii.ac.jp/records/2434>
- ・荻原元所長 <https://ycu-history.repo.nii.ac.jp/records/2457>

災害時の活躍 — 関東大震災 —

2病院を擁する本学は、これまで様々な災害時に活躍してきました。本学の歴史前史となる横浜十全医院時代、関東大震災発生時の出来事を紹介します。

1923年9月1日午前11時58分、関東地方を大地震が襲いました。

相模湾北西部を震源とする（諸説あり）この地震では、連続的に十数回にわたる激震が発生し、東京、神奈川、千葉、静岡、その他付近各県に甚大な被害を与えました。

建物や家屋の倒壊はもちろん、漏電による発火が頻発し、火災による被害も多く、死者・行方不明者数は10万人を超えることとなりました。

十全医院（西区老松町）は、壊、さらには付近の失火により焼失してしまいました。

最初の激震により、崖際に建っていた山手病棟が約35度傾き、それと同時に全ての建物の天井が崩落、廊下一帯の窓ガラスも物凄い音とともに破損しました。

当時院内には、入院患者はもとより外来患者も多く、事態は混迷を極めます。

しかしながら、日々の訓練により、職員は患者を背負ったり、担架に乗せたり、誘導して、辛うじて中庭に避難したのでした。

結果的に、当日の入院患者129名、職員約150名は、僅かに3名が擦り傷を負った程度で済んだといえます。

避難した入院患者と増え続ける被災者の診療のため、何とかして病舎を確保するべく、職員は寝食も忘れて東奔西走し、焼け跡からトタンや木材などをかき集めました。

しかし、急ごしらえの病舎は雨風に弱く、一刻も早い頑丈な病舎の確保が望まれました。

そんな折、震災から3日後、平沼久三郎氏から、隣接する邸宅を病舎として使用するとの申し出を受け、6

十全病院の被害状況

本学附属病院の前身である

たものの、病舎はごくごく倒

れました。

復興に向けて

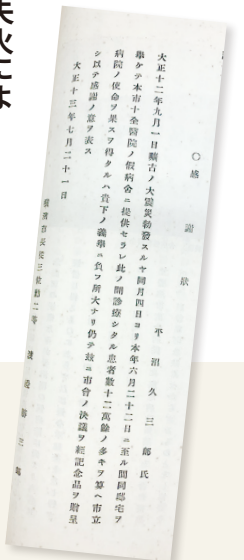
地震による人的被害は免れ

診療が再開され

ました。



焼失した横浜十全医院



平沼久三郎氏宛
感謝状

参考文献

- ・横浜十全醫院「編」『横浜十全醫院要覽』横浜同愛記念病院、横浜十全醫院、1933年
- ・「関東大震災起こる」東京日日新聞、1923年9月2日朝刊、1頁
- ・内閣府Webサイト「関東大震災100年」特設ページ」
<https://www.bousai.go.jp/kantou100/>
(2023年9月15日閲覧)

100周年記念事業へのご協力をお願い

横浜市立大学は2028年に創立100周年を迎えます。未来に向かって本学が発展し続けるため、4つの記念事業プロジェクトを推進しています。ぜひ、本学の取組にご賛同いただきご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

問い合わせ先 横浜市立大学基金担当：045-787-2447

詳細はこちら

